反町遺跡について

― 古墳時代の大開拓地 ―

国際・文化学部　B班

伊藤輝子　榎本英男　太田喜久江

鬼島紀世子　佐藤正人　須長孝子

関根雅夫　中島美根子　藤島恭子

山本悦子　森本ハル子

はじめに

私たち国際・文化学部Ｂ班は、市内の遺跡について調べ始めたところ、大変多くの遺跡があることに驚かされた。その中で、現在賑やかに営業している「ピオニーウォーク」の下に「反町遺跡」が眠っていることを知り、興味を持ち、調べることにした。

市内で初めての遺跡の発掘は、昭和２９年(１９５４年)の五領遺跡で、竪穴式住居跡等が出土している。

反町遺跡は都幾川と越辺川にはさまれた高坂台地の東側に広がる低地に位置しており、平成１７年から発掘された遺跡である。大規模なムラ跡とみられるこの遺跡からは、最新の土木灌漑技術をもとに堰が築造され、低地の水田開発に挑戦した。また数多くの古墳群が検出され、弥生時代から古墳時代にかけて大変栄えていた事を知ることが出来た。また、玉つくり工房、鉄剣を副葬した前方後円墳、奈良、平安時代の河川祭祀跡などの発見は特筆される。

それらを次の４分野で紹介したい。

Ⅰ　弥　生　時　代　　人々が住み始めたころ　約1800年前
Ⅱ　古墳時代前期　　低地を開発したパイオニア　約1700年前
Ⅲ　古墳時代後期　　人々は去り、古墳ができる　約1500年前
Ⅳ　その他の出土品

年表

時代		市内の人々の生活		同時代の市内の遺跡
旧石器時代 BC７000		生活様式を知るには資料が少ない		大谷地区丘陵部 キジヤマ
縄文時代 BC4000	早期	住居跡が検出された		五領・立野
	前期			緑山
BC3000	中期 後期	全盛期時代		中原・岩の上・前山 塚原・キジヤマ
BC1000	晩期	遺跡の減少から住人も姿を消したと思われる		附川
弥生時代 BC300	前期	後半頃から再び人々は定住したと考えられる		大西・駒堀・観音寺・ 岩鼻・五領
古墳時代 AD４00～ 600	前期	堰、玉つくり工房等がつくられた		銭塚・城敷
	後期	前方後円墳と円墳がつくられた		
飛鳥時代 AD700		低地から台地に住民が移住した		

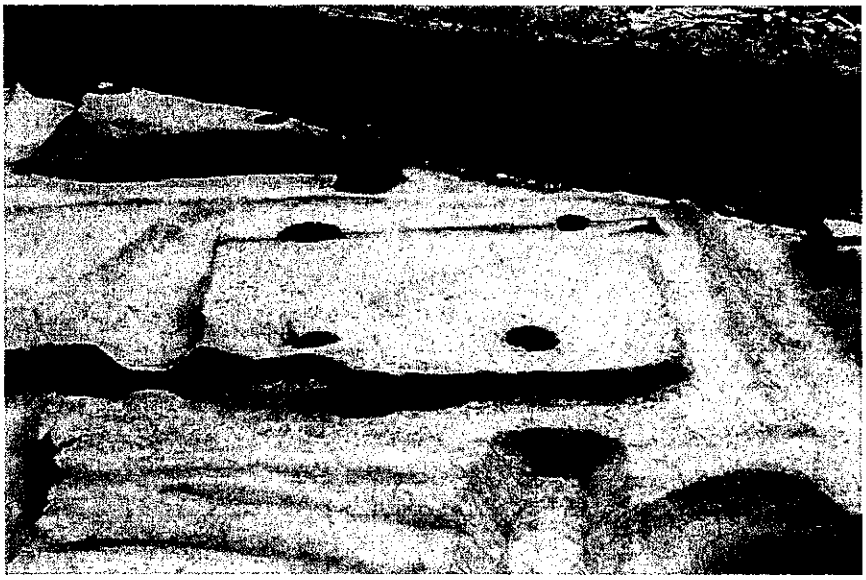
Ⅰ弥生時代　　約1800年前（紀元前５世紀～３世紀後半）

弥生時代とは紀元前５世紀頃から３世紀後半を言い、縄文時代の狩猟・採取生活から稲作の生産へと移行していった時代である。後期には、農具も木製の鍬や鋤、石製の鎌や包丁から鉄製農具へと変わっていった。農耕が発達するにつれ、貧富の差が生まれ人々を指導する有力者があらわれ、作物をめぐってムラとムラとの争いが始まった時代でもある。

弥生時代の中期後半から後期後半の遺構が検出されており、中期では大型住居跡を伴う集落が、後期には墓域へと変化しており、方形周溝墓や土器棺墓が発見された。後期前半の遺構としては、県内でのまとまった資料となっている。後期後半は、比企地域を中心に分布する「吉ケ谷式（よしがやつしき）」の遺構は見つかっておらず、反町遺跡の集落は一旦途絶えたと考えられる。再び人々が暮らし始めたのは、弥生時代後期と思われ、都幾川のほとりの低地にムラをつくり、弥生土器を使っていた。

１竪穴住居跡

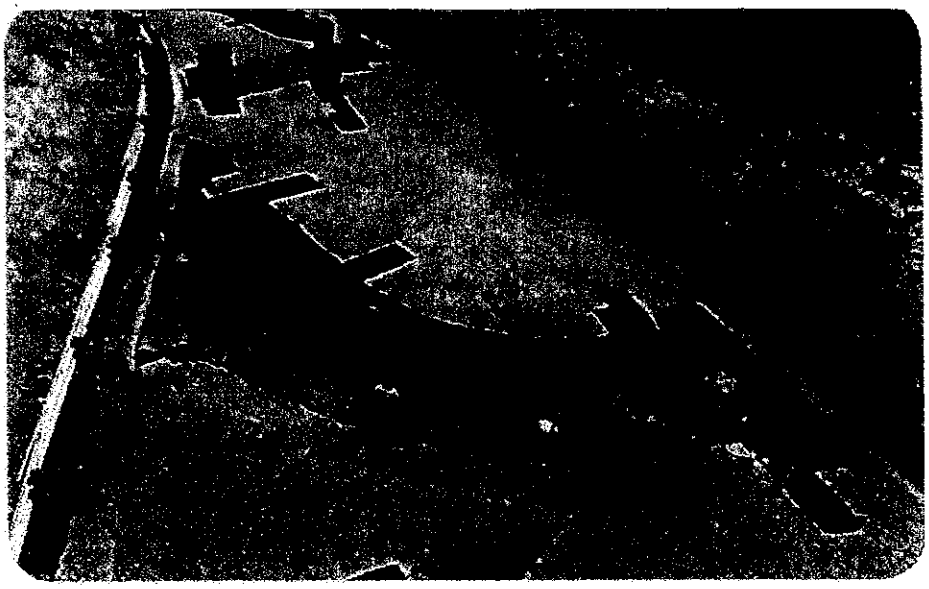
特徴は隅丸方形に近く炉の数が単数である。確認された 21 軒のなかで大きいものは8.20m×3.34mで、小さいものは3.35m×2.87mである。



竪穴式住居跡

２方形周溝墓

方形周溝墓とは、周囲に溝を四角くめぐらせ溝を掘った土を中央に盛り上げた墓で、弥生時代から古墳時代に造られ複数の墓が集まっているのが特徴である。方形周溝墓の溝から底に穴を開けた壺が出土した。底抜けの土器は非日常的なことであり、壊れた土器の近くからは赤い顔料が見つかった。赤い色は死後の世界を彩る特別な意味をもっていたのではないかと思われる。



方形周溝墓跡

3 溝跡

溝跡は住居跡には分布しておらず、区画溝の性格をもつ可能性がある。そのうちの一つは長さ 11.60m、幅 1.4～1m、深さ 43～59cm である。出土品は岩鼻式の壺・甕・高坏・鉢などがある。

4 出土品

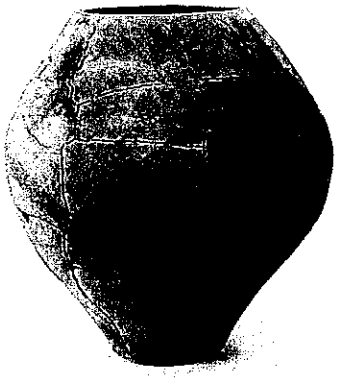
1） 土器棺墓

土器棺墓とは、土器に入れることができる子供の棺としたものであり、数が少ないことから、その子供は特別な立場にあったと考えられる。

埋納の方法は、壺を横に置き胴体部分の上半分を割り遺体をいれ、欠いた破片や別の土器で口の部分や上部に蓋をした。幼子を亡くした親の思いが強く感じられる。

本遺跡からは 2 基検出され、二つは 30m以上離れていたことから相互に独立した、単独のものと考えられる。

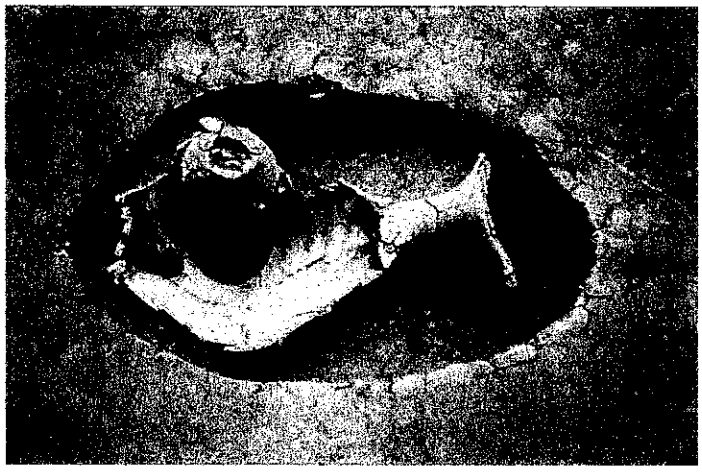
（1）方形周溝墓の近くで出土し、同時期の可能性もあり、大きさは胴部最大 33.0cm、器高は 34.8cm。模様は、基本的に刷毛目で上部は縦方向、中程から下は横方向である。



土器棺墓

（2）弥生時代後期の岩鼻式土器の棺で、口の形は東京湾沿岸、頸の斜めの格子模様は長野県、鋸歯状の模様につけられた縄目は関東地方に多くみられるものである。いろいろな地域の要素がミックスされたこの壺は一体どのような経緯で作られ、子供の棺とされたのであろうか。高さが 70 ㎝を超え胴部 46.3 ㎝と大型である。

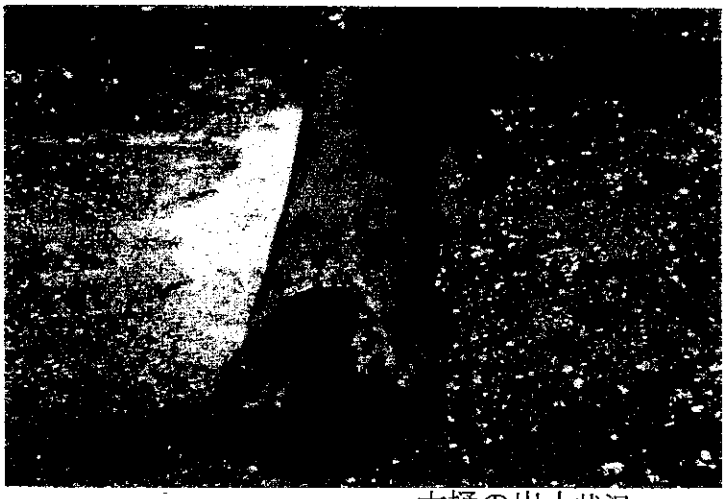
土器棺墓



土器棺墓出土状況

2）木樋（もくひ）

弥生時代末～古墳時代前期にかけてのものと思われる木の樋が発見された。横から見るとU字形をしている。両側が欠けて、長さ 178cm 幅 31cm である。飲み水や生活用水は、遺跡の中を流れる川から汲んだ方が簡単であるが、この樋は何か特別な施設の「導水管」に使われた可能性もある。館の内部と外部をつなぐ導水施設（水道橋）として使用されていることが多い。全国的にみても、愛知県・奈良県・大阪府・広島県などで 10 数例確認されているのみである。



木樋の出土状況

木樋の使用状況は掘り込みに木樋を埋めて設置し、灌漑施設、導水施設、祭祀遺構などに用いるのが一般的である。本遺跡では木樋状製品が出土しているが、

固定方法など使用状況、用途は不明である。

3）梯子

一点のみ梯子が出土した。

残存長 133.0cm、最大幅 9.5cm、最も厚い部分は 2.6cm である。傷みが激しく、製品の表面は残っていない。足掛部の突起が２箇所認められ、間隔は約 42cm である。上位の部分の厚さは 5.5cm、下位の部分の厚さは 6.0cm になる。樹種はモミ属、丸木である。

4）その他の出土品

住居跡、溝跡等から多くの物が出土した。

土器は後期後半のものと思われる、櫛描簾状文と櫛描波状文を施す岩鼻式の甕、壺などである。

（1）甕
（2）壺
（3）鉢
（4）高　　坏
（5）砥　　石　　結晶片岩、軽石・　長さ 15.6cm 幅 7.6cm 重さ 535.2ｇ　他
（6）勾　　玉　　土 製 品・　長さ 6.2cm 幅 3.9cm 厚さ 2.0cm
（7）敲（たたき）　石　　石 製 品・　長さ 9.0cm 幅 6.0cm 厚さ 3.2ｃｍ 重さ 207ｇ　他
（8）磨 製 石斧　　凝 灰 岩・　長さ 6.6cm 幅 5.5cm 厚さ 3.2cm　66ｇ　他
（9）垂（すいしょく）　飾　　結晶片岩・　長さ 4.2cm 幅 2.2cm 厚さ 0.3cm 重さ 4.6ｇ

Ⅱ古墳時代前期　　約１７００年前（４～５世紀）

弥生時代に比べ遺跡数が急増し、大規模なムラが構成される。多くの土器が出土したほか、銅鏡、ガラス小玉の鋳型、木製農具の臼なども出土され、水晶等の石材加工を行った玉作工房跡や治水灌漑用の土木施設である堰跡も検出され、これらの遺跡が、当時この地域の中心的なムラであったことを示している。

１大溝(河川跡)と堰

大規模な河川の跡を大溝と言い、蛇行した河川で川幅が 30m 以上の所もあり、長さ 130m、深さ約３m、の河川跡が検出されている。

南北約６m の溝底際には横木を流路と平行に据え、それを斜面に大径木をみかん割りした杭で留めた形の施設と思われる木組みが階段状に検出された大規模なものである。

約１m 間隔に杭が打たれ、本来それに２m の横木が組み合わせてあったものと考えられ、その配置から水場遺溝の可能性が高いと考えられる。

この大規模な堰によって、川の流れる方向を変え、水量を調節し分水された。低地の水田開発のパイオニアとして注目される。

川底からは古墳時代前期の壺、鉢等土器が、下層からは編組製品等木製品が多く検出されている。

堰

２住居跡

250 軒を上回る住居跡で、竪穴住居跡が 163 軒検出され、古墳時代前期の集落としては県内屈指の規模になる。住居跡の覆土には砂塵の堆積が見られるものがあり、大規模な洪水のため、住居が埋没し、古墳時代中期前半の遺跡が途絶されたことが考えられる。

それらは隅丸方形で大型のものは長軸 6.5m、小型のものは長軸４m。柱穴はこの時代の典型的な４本柱穴はほとんど見られず、不整な円形または楕円形で５本柱や２本のものもあり、台地上のものと大きく様相を異にしている。床面は平坦で、カマド、炭溜まり、貯蔵穴が検出された。扉や壁材が出土しており、板壁の建物が建っていたことを窺がわせる。

３畠跡

方形周溝墓より新しく、古墳跡より古いと考えられる。

さく跡の東西方向は 0.9m～2m 間隔、南北方向は 1.4m間隔で一定していない。

さくの形態は先端の丸い溝状で、幅は 10cm～30cm、深さは浅く 5 cm～15cm ほど。畠跡は 4 箇所認められている。

畠跡

4 出土品

大溝跡からは自然木、流木とともに多くの木製品が出土している。

1）木製農具、建築材

(1) 曲柄平鍬　なすび形　肩部と刃部の先端は欠損　コナラ属アカガシ

(2) 直柄の平鍬　柄の一部が遺存しているものある　イチイガシ

(3) 膝　　柄　未成品の可能性あり　エゴノキ属、サカキ

(4) 木　　錘　織物（むしろ等）の製作に使用　ハイノキ属

(5) 樹皮巻き　曲物を綴じる際に使用

(6) 板　　材　両端は欠損しているが、側縁部はやや薄く仕上げられている。炭化している物や工具痕のある物もある。モミ属イチイガシ

(7) 柱　　材　芯持丸木　残存長 61.2 cm径 12.9 cm　コナラ属アカガシ亜属

(8) 杭　　残存長 43.9 cm径 12 cm先端斜めに削られている　芯持丸木ナラ属アカガシ亜属、クリ、モミ属　コナラ属クヌギ

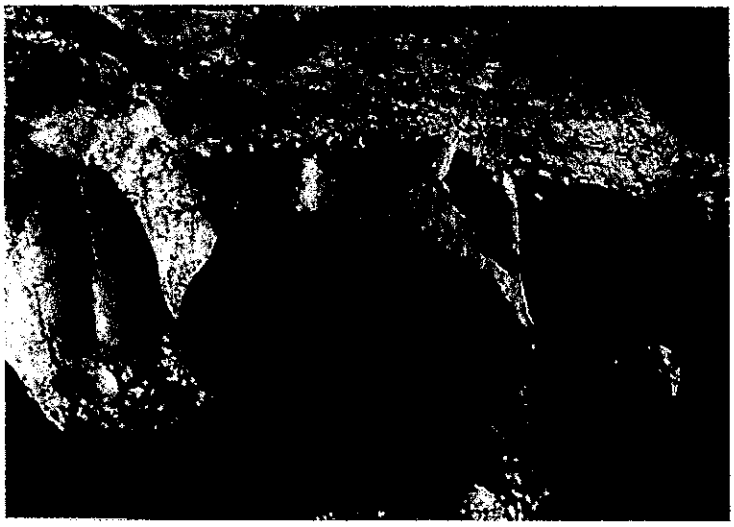
(9) 多又鋤　一木で四本刃、平面は長方形、割れや欠損が多い、特に肩部刃先端は大きく欠損している。残存長 45.2 cm軸部の推定幅 14.6 cm厚さ 2.0 cm肩部から刃部先端にかけてうすくなっている。柾目、コナラ属クヌギ

多又鋤

(10)扉　の　楣　観音開きの扉に使用　残存長 117.9 ㎝幅 21.1cm 厚さ 4.7 ㎝
両扉がとじる部分の手前がドーム状に削られている。工具痕が認められる。イチイガシ

2）大型臼

外面を削りこんで持ち手を作る形態で、大型臼としては保存状態がよく、関東地方での完成品としては初出となる。高さ 40 ㎝直径 60 ㎝の木製で、胴の中央付近がくびれていることから穀類の脱穀や精米に使用されたものと考えられる。製品の使用状況を知る貴重な資料である。



大型臼の出土状況

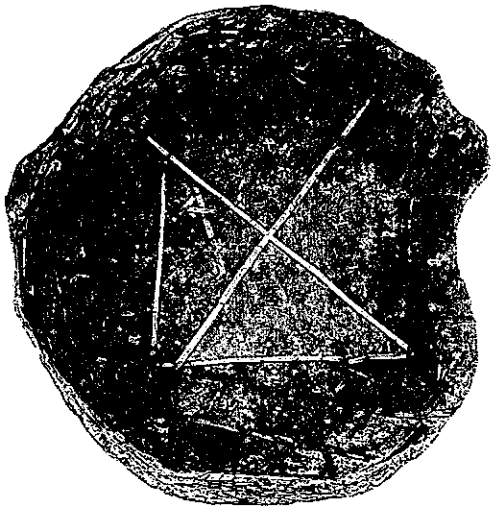
木臼の使用方法
中にお米を入れ、バットに似た竪杵で搗いて使いました

3）編組製品

溝跡堆積物中から 4 点出土している。

(1)大型かご　口径 159 ㎝高さ 17 ㎝
口縁部が大部分欠損している。
幅 2 ㎝前後のマダケの割り裂き材を使用、底部が円形で大きく、六つ目編み。その中央部分に一辺 83 ㎝の方形の網代編みの敷物を重ねてある。
マダケ製の大型品として、国内でも例がない。

(2) 敷物あるいはスダレ状の製品 2 点
裏面に刃物痕が多く見られる。裏返して再利用されている。



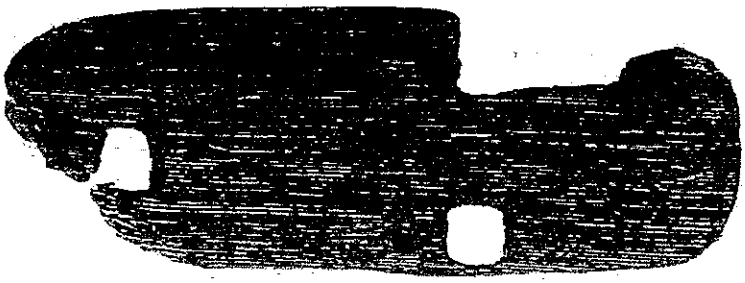
大型かご

(3)編組製品が二重に重ねられたもの　底部は網代編みで方形、体部は円形で上に向かってひらく形状でござ目編み。外縁は腐朽して無い。

4）下駄

一木作りの連歯下駄　前部と右後部は欠損している。隅丸方形

残存長 23.9 ㎝　幅 8.8 ㎝　厚さ 1.3 ㎝　高さ 2.4 ㎝　右足用　スギ



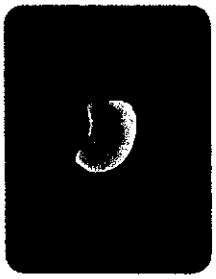
下駄

5）漆器

ケヤキやトチノキの漆塗椀が出土。直径 6cm の漆の自然木が出土していることから、遺跡の近辺でウルシが栽培されていたことを示している。

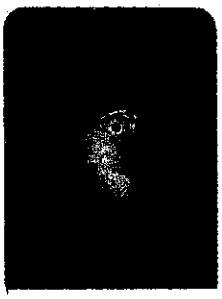
6）玉作りとガラス小玉鋳型

本遺跡では、関東で初出となる古墳時代前期の水晶を素材とする勾玉の工房跡が検出、又緑色凝灰岩を素材とする管玉も製作しており、古墳時代前期の玉作り遺跡として注目される。玉作り工房跡とするには、いくつかの条件が必要とされる。



水晶の勾玉

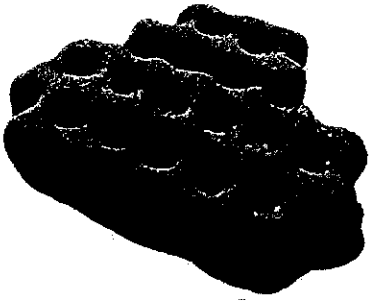
・竪穴住居跡などの工房となる空間的な範囲を持つ施設の存在。
・工房内に玉作りに関連する工作用の施設が敷設される。
・施設内から製作に必要な工具類が出土すること。
・玉作りの製作工程が復元できる未製品と共に製作工程で生じる破片類や原石が出土する、ガラス小玉鋳型の破片が住居跡内から検出されること。



碧玉の勾玉

ガラス小玉鋳型は、県内では初出となる。鋳型には鋳型孔の中に細かなガラスフラグメント（ガラスのかけら）が残存しており、成分分析を行ったところ紺色のカリガラスであることが明らかになった。カリガラスは弥生時代から古墳時代にわたって流通し、特に弥生後期から古墳前期に多くなる。ガラス小玉の製作方法は古墳時代前期になるとこれまで一般的に見られた引き伸ばし法から鋳型によるガラス再生法へと変化がみられるようである。このようなガラス鋳型は、関東南部地域から出土している。この遺跡では国内に数多く流通していたカリガラス製品の破損品を集め鋳型を使ってガラス小玉に再生産されたことになる。

本遺跡のガラス鋳型出土の意義はこのような歴史的背景の中で位置づけることが出来る。



ガラス鋳型

7）内行花文鏡

小さな銅鏡が検出された。住居跡中央部の床面から27cmほど浮いた状態で出土しており、住居跡に直接伴うものとは言い難く、一定期間経った後に廃棄されたものか、あるいは溝跡、土壙等の別の遺構に伴う可能性が考えられる。長径7.5㎝、重さ26.7ｇ、鏡縁部厚2.3㎜、鏡体部分の厚さ0.8～1.0㎜である。銅色は全体に黄味がかった青緑色であり、鏡面側の周縁部には無数のひび割れがある。鏡背は鈕孔の周りに不鮮明な円圏を二重に巡らし、内区文様は六弧の連弧文である。連弧文の間にはそれぞれ珠文が１つずつ配されている。珠文を、仔細に観察すると、鈕側に「ハ」の字状の細線がつき、「只」字状を呈しているものがある。これは舶載（はくさい）製内行花文鏡（大陸からもたらされた鏡）の単位文様の一つである結目状文の可能性もあり、注目される。本鏡は鈕孔下辺が鏡背面と高さが一致することなどの形態的特徴から、古墳時代前期の仿製（ほうせい）鏡（日本製の鏡）と考えられる。

内行花文鏡

5 土器について

本遺跡からは、いずれも土器の土は在地のものであることから、搬入品ではなく模倣による在地生産である可能性が高く、製作においても中心的な役割を果たしていたと思われる。人々のくらしは豊かになり人口も増えムラは大きくなった。住居跡からの出土土器は多種多様だった。

1）土師器

土師器とは古墳時代から奈良・平安時代にかけて作られた素焼きの土器の総称で、赤色（べのたみ）で文様はない。弥生土器から発達したもので名の起こりは宮廷の食器を作る部民（にえのはしべ）を贄土師器部と名乗ったことによる。この遺跡から出土した土師器の中

心となる年代は古墳時代前期～後期、平安時代である。

（1）機種

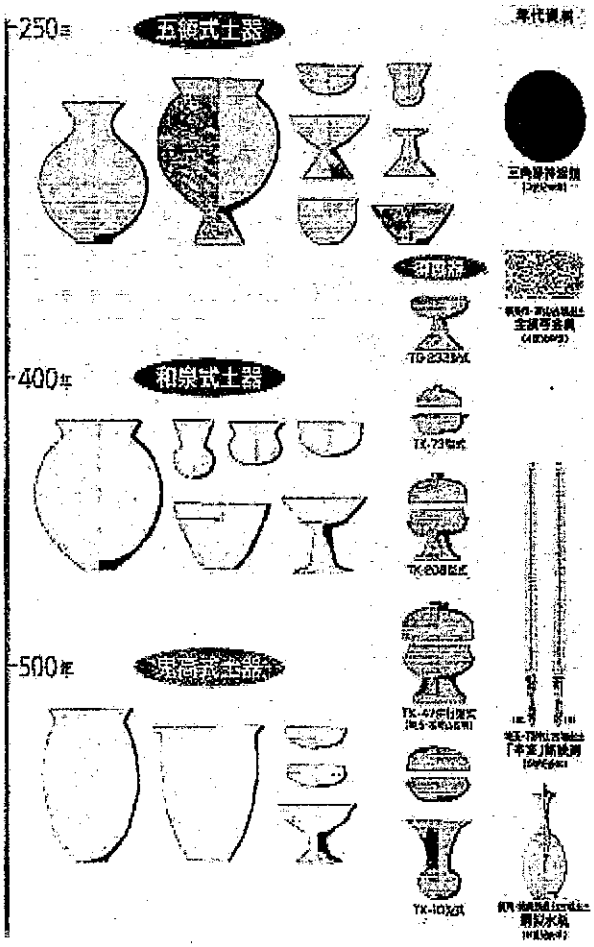
① 壺　　首が長く大型が多い。穀物などの貯蔵用
② 甕　　口が大きく開き深い。煮炊き用
③ 鉢　　食べ物の盛り付け用
④ 埦　　食べ物を盛り付け食事用
⑤ 杯　　今で言う茶碗
⑥ 高坏（たかつき）
⑦ 器台
⑧ 坩（かん）　　ちいさいつぼ
⑨ 甑（こしき）　　蒸し器
⑩ 皿など

2）標式土器　（時代を推測する基準となるもの）

古墳時代の土器には土師器と須恵器の２種類がある。この図に示すのは弥生土器の系譜にある土師器の方である。

五領遺跡の調査により古墳時代の土師器の全貌がほぼ明らかになり、その遺跡の出土土器を標式として設定された。現在の五領式―和泉式－鬼高式という編年序列ができた。五領式土器の基本的特徴は弥生土器的な文様装飾を省略して無文化していることと、新たに小型精製の器台と坩（丸底土器）が土器のセットに加わっている。

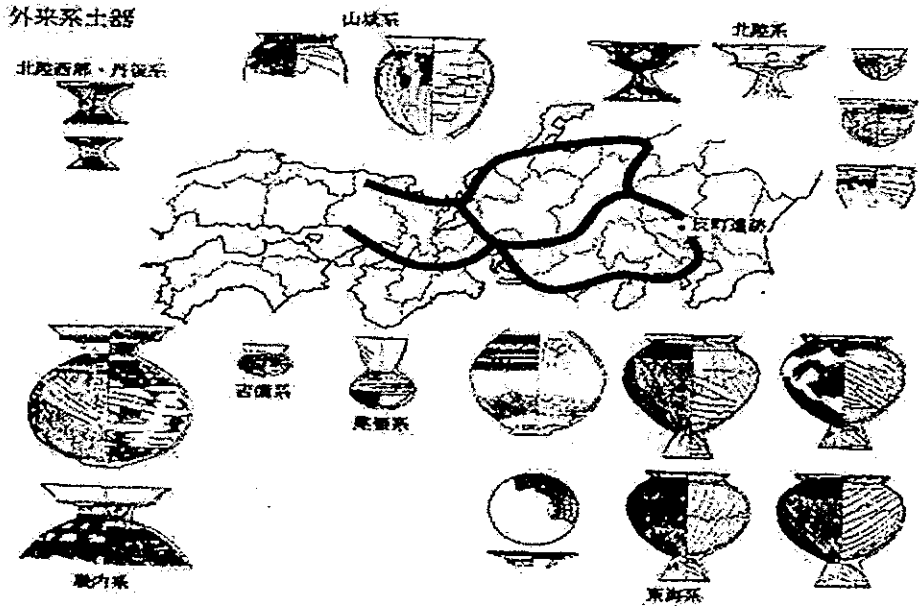
反町遺跡の土器類は五領式のものが大部分であり、非常に高度な作りの物が多いのが特徴である。



3）系統

（1）弥生後期　　岩鼻式・吉ヶ谷式土器の搬入見られず
（2）古墳時代前期　五領式　外来系土器様式が入る
　　東海系　S字甕・壺
　　尾張系　ヒサゴ壺
　　山城系　叩き甕

畿内系　装飾壺
吉備系　鉢
北陸系　鉢　装飾器台
北陸西部・丹後系　器台
（3）古墳時代中期　和泉式　平底の甕・高坏・小型坩
（4）古墳時代後期　鬼高式　須恵器の搬入が見られる
土師器は須恵器模倣坏が出現する。



Ⅲ古墳時代後期　　約1500年前（6～7世紀）

大規模に栄えたムラは、洪水などの自然災害等で押し流された土砂に埋もれ、耕地は失われ、集落は消滅し、代わってこの地を治めていた豪族の古墳の構築が始まり、古墳群に変化した。5世紀後葉から古墳郡の築造が開始され6世紀後葉までは継続的に古墳群の形成が続いたものと考えられる

1前方後円墳

全長 35m、後円部の径は 22mの1基の前方後円墳が検出され、墳丘に沿って周溝が設けられる。前方部では長さ2.8m、幅0.7～1.1mの長楕円形の範囲に白色粘土を敷き詰めた粘土槨とよばれる埋葬施設が検出された。通常は後円部に主体的な埋葬施設が造られ、前方部で検出されるのは珍しい。その部分から、副葬品としての鉄剣一振が出土した。鉄剣は長さ 75 cmあり、切先を南に向けており、北頭位の被葬者の左脇に沿って腰から下げたような状態で副葬されたと思われる。築造期は5世紀末頃と推定される。

鉄　剣

前方後円墳

2円墳

円墳は全体として 28 基が検出され、前方後円墳を盟主墳として、周囲に円墳 11 基が確認された。それ以外の円墳は、写真のような形態で出土し、調査用の番号が付けられた。その番号別に次の表で説明する。

いずれの古墳群も墳丘部は削平をうけており、主体部の位置や、構造等は確認できていない。

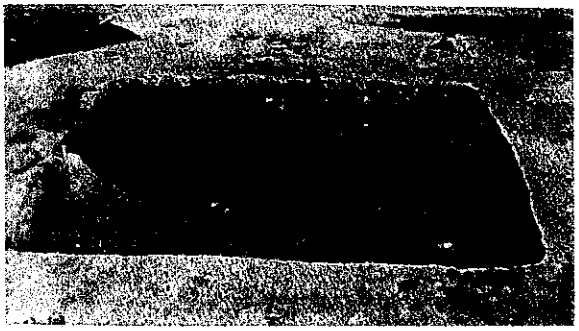
円墳出土状況

円墳	墳丘径	周溝径	出土品	その他
１３号	19.5m	28.5m	円筒埴輪 形象埴輪（馬） 土師器（坏） 須恵器（壺・甕）	入口は北西を向いている。出土品から６世紀初頭に位置づける。
１４号	10.36ｍ × 9.97m	14.42ｍ × 13.92m	円筒埴輪（破片） 小型の壺（１個） 坏（１個） 木製の鋤（全長 112ｃｍ）	入口は西を向いている。１５号とは４０ｃｍまで接近し、１４号の西の部分を１５号の東の周溝が避けているので１４号が先と推定される。
１５号	11.18ｍ × 11.00m	17.04ｍ × 14.80m	円筒埴輪（破片） 形象埴輪（破片） 土師器（坏） 土製（勾玉）	入口は北西にある。出土品は西側、及び南側周溝出土の土師器が主体なので６世紀初頭から前葉の作と思われる。
１６号	約 13.80ｍ	約 21.20ｍ	円筒埴輪 形象埴輪（馬・家・人物半身） 土師器（甕の破片） 土製（勾玉、他からの混入か不明）	入口は北西を向いている。出土品から６世紀前葉の作と位置づける。
１７号	12.24m	19.20m	円筒埴輪 形象埴輪（人物・馬等） 土師器 須恵器 鉄の鎌（一部）	入口は北東を向いている。２７号墳が１７号の周溝を避けているので１７号が先行築造されている。女子の人物埴輪の頭部形成技法から６世紀中葉位かと思われる。
１８号	14.10ｍ × 12.38m	18.46ｍ × 16.76m	なし	入口は北西を向いている。１５号の周溝を避けているので１５号より後、古墳群形成過程の後出段階の所産と考える。
１９号	17.92ｍ × 16.92m	24.80ｍ × 23.32m	円筒埴輪 形象埴輪（人物・馬等） 土師器（坏）	入口不明。周溝から出土した大型土師器の模倣坏から、６世紀初頭を中心とした年代と比定したい。
２０号	12.70m	17.18m	土師器	入口は西を向いている。１９.２１.２３.２６号の５基とは小群を形成している。出土品の土師器から６世紀前半に位置づける。
２１号	17.60ｍ × 17.56m	25.48ｍ × 24.12m	円筒埴輪 形象埴輪（人物・馬等） 土師器（坏） 須恵器	入口は南西を向いている。群中では大型墳、出土品の大型有段口縁坏から６世紀第３四半期に位置づけておきたい。
２２号	11.06ｍ × 10.58m	15.20ｍ × 14.54m	円筒埴輪 形象埴輪（人物・馬） 土師器、須恵器	入口不明。２４.２５号と小群をなしている。６世紀前半の築造と位置づけたい。
２３号	13.34m	18.79m	円筒埴輪 土師器（甕）	入口は南西を向く。２条３段の円筒埴輪が出ているので６世紀後半の作りとしたい。
２４号	16.84ｍ × 16.20m	24.04ｍ × 23.40m	円筒埴輪（破片） 形象埴輪（半身像人物） 土器（赤彩を施す坏）	入口を持たない周溝の全周するタイプ。６世紀前半に位置づける。
２５号	18.12ｍ × 16.00m	25.72ｍ × 20.72m	円筒埴輪（少量出土） 形象埴輪（人物の破片） 須恵器（甕の破片） 瓦	入口不明。須恵器の甕の出土品等から６世紀中頃から後半に位置づけたい。

２６号	12.34ｍ × 11.65m	14.91ｍ × 14.18m	土師器（周囲から流れ込んだのではないかとおもわれる。）	入口については触れられていない。２０号と小群を形成していることから、６世紀前半に比定しておきたい。
２７号	14.20m	20.00m	円筒埴輪 土師器（甕・坏） 須恵器（甕） 木製品（鋤ないし堀棒）	入口については触れられていない。東の１７号を避けていることから１７号より後、体部の扁平した比企型坏と、らせん状のかき目の須恵器から、６世紀前半と比定される。
２８号	6.40m	9.60 ｍと推定	なし	入口は南西を向いている小さな円墳。１３号を意識した従属墳的なので、１３号と同時期か、あるいは後出か。

３住居跡

３軒検出された。竪穴住居跡は２軒のみで、南北にカマドが構築され、４本主柱穴が確認された。



住居跡

４出土品

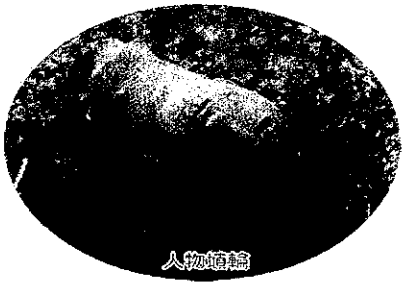
１）埴輪

（１）円筒埴輪　埴輪の中で最も多く、基本的には向かい合わせに孔が開けられ、運ぶ時や並べる時に棒を通した、又は焼き上げる時に、火の回りを良くする等の説がある。孔には擦れた痕跡は見られない。

埴輪

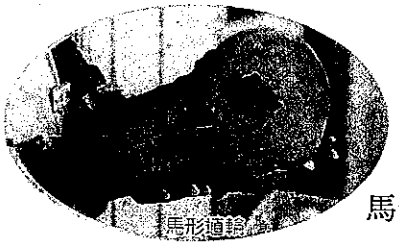
（２）形象埴輪

①人物埴輪



人物埴輪出土状況

②動物埴輪　馬、犬、水鳥など。



馬形埴輪出土品

③器財埴輪　盾、甲など古墳の番人の意味が込められていると思われる。
※埴輪は７世紀になると前方後円墳の終焉とともに作られなくなった。

Ⅳその他の出土品

飛鳥時代以降のものと考えられる出土品として次の物がある。

１祭祀と神事

古墳時代前期～後期・奈良・平安時代にかけて汀線が変更したため居住域にするには、地盤が安定していなかった。流路変更が祭祀場として非居住域になったと思われる。

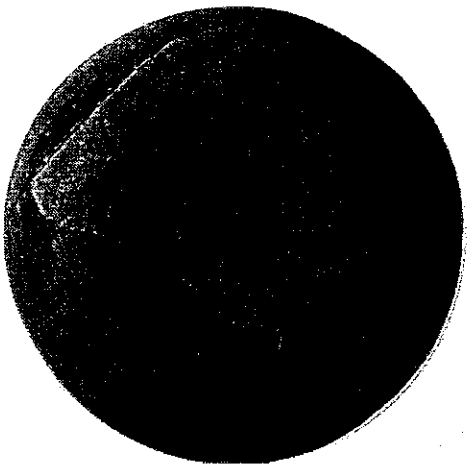
1）弓矢と的のまつり（平安時代）

その年の豊作を祈願したり、魔除けの意味で的をめがけて矢を射る儀式。大溝からは祭祀に使われた特殊な矢じりの「雁股鏃」や的に使われたと思われる大きなカゴ、「神矢」「弓」と書かれた土器などがまとまって発掘され、神事が行われた可能性が考えられる。

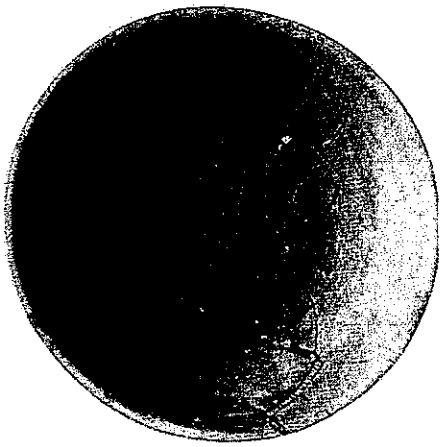
岸辺に並べられた須恵器坏には土師器甕で炊いた米と刺網で獲った魚、長頸瓶に入れられた酒が神に献じられ、祀りの一シーンとして神矢を射掛けたのだろう。

「飯万呂」と「三田万呂」と書かれた墨書土器が出土している。万呂が共通することから親子、兄弟など血縁関係にある名前とおもわれるが、土器そのものから先後関係、親子関係を導くことは難しい。敢えて言えば、飯万呂の記された須恵器坏の方が口径・底径の縮小化が認められ新出の要素が有る。どのような人物であったのかは不明であるが、おそらく祭祀を主宰した人物の名前ではなかったか。土器に見られる様相差があるとすれば、「三田万呂」から「飯万呂」に祭祀の主宰者が引き継がれたことになる。いずれにせよ都幾川の織り成す広大な可耕地を掌握した有力な在地豪族の存在が想定される。

雁股鏃



墨書土器（三田万呂）

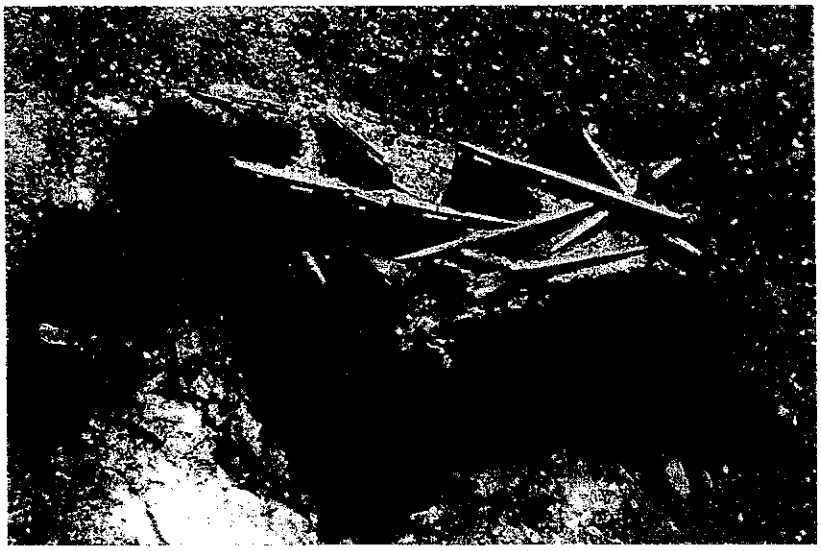


墨書土器（神矢）

2刺網浮子（さしあみあば）

古代の漁業には、網漁法と釣漁法があり、浮子は網漁法に用いる漁網を構成する部材のひとつである。漁網は浮子のほか網、錘からなる。出土した古代の浮子は付近から土錘が多数出土しており、網は出土しなかったが、一つの漁網だったと思われる。浮子と土錘から漁網は刺網、投網、曳網などが考えられる。今回出土した土錘の重量は3.3～13.5ｇと軽量で１点のみ83.8ｇと重みがあり、この漁網は刺網と推定される。

浮子は11.02㎝～21.3㎝の長さで、木製品。割り箸ほどの大きさで、両端に切り欠きがある。樹種は、スギ、モミ、ヒノキで柾目と割材がある。浮子と土錘が 10本以上がまとまって出土した。浮子の切り欠きは紐を結ぶためのものである。また刺網漁とは、川に張った網に魚を追い込み、網に刺さった魚を捕獲する漁法である。刺網浮子の発見は県内初出である。



浮子の出土状況

3 金銅製花瓶

大溝跡のある程度埋没した段階の粘土層(地表面から約 2m下)から発見され、花瓶は高さ 8.8 cm、口径 2.2 cm、胴部最大径 4.4 cm、脚部径 3.2 cm、重量 92.91 g と、とても小さく均整のとれた丁寧なつくりで、徳利に似た形から、徳利型一輪挿花瓶と呼ばれている。鋳銅製で頸部に二条線、胴部に子持ち三条線が 2 単位刻まれて、条線はシャープである。表面には金の被膜が一部残され光っていた。銅錆(どうさび)に被われた下に、金の被膜が全面に残されており、金メッキされた可能性が高い。
花瓶は「ケビョウ」と読み、仏具の花入れとして用いられた。出土した花瓶は鎌倉時代後期頃につくられたと考えられ、国内最古段階の出土例である。

金銅製花瓶

金銅製花瓶出土状況

おわりに

私たちはグループが決まり、当時「ピオニーウォークの遺跡展」が開かれていることを知り、皆で見学に行きました。その時の埋文センター職員の方の魅力的な説明に感動し、全員でこの「反町遺跡」について調べてみたいという気持ちになりました。しかし歴史に興味のある人、歴史に詳しい人、全く興味も知識もない人の集まりで、どのように纏まるのかと心配でした。又始めてみたら、あまりにも多くの専門の資料があり、自分たちの言葉でのレポートにするにはかなりの努力が必要でした。努力は無駄にならず、それぞれの人が、東松山市の先人たちの素晴らしさを知るとともに、歴史、遺跡に興味を持つようになりました。これからも発掘される遺跡に目を向けていきたいと思います。「分かりやすい言葉で」をモットーに纏めたレポート。読んで頂いた方々にご理解頂けたかが気がかりです。

最後に、埋文センターの職員の方々には、いろいろご指導頂きましてありがとうございました。

参考文献

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　反町遺跡　Ⅰ　Ⅱ
埼玉県埋蔵文化財調査事行団発行　さいたま埋文リポート　２００６
さいたま埋文リポート　２００８
さいたま埋文リポート　２００９